

92

飯田大人之略傳

264

899

緒言

特47
775

此傳は我が師飯田大人の歸幽せられし翌
ち明治四十年六月誌し、ものなるが今年
の五年祭に當れるを以て之を小冊子とし親
く教を受けし教師信徒或は大人の徳を慕ふ人

等に願ち以て世にまじ、昔を忍び奉り相互に
語りつき言ひつきもて行く語らひ草の種とも

明治44年
44.4.27
大人内交

なりて師徳の世に傳はらんことを希ふこと切
 なり然れとも余淺學菲才にして傳記體を得ず
 文詞章を成さず且つ事實の萬一だも述べ得ず
 爲に却て師徳を汚すことあらんを恐る見ん人
 希くは心を酌みて深くは咎め給ひそ

明治四十四年四月十四日水屋敷に於て

石田守義 識

飯田大人之畧傳

石田守義著述

大教正飯田太壽大人は通稱を岩治郎と申され安政五年三月二十三日
 奈良縣生駒郡安堵村に生る父を文吉母を貞子と申されました文吉の
 兄善六家を繼がれましたが子なきを以て甥たる大人を養ふて子とせ
 られたのです

飯田家は村の舊家で有て代々豪商で有りましたが祖父の代に家産を
 失はれたので養父善六家を繼がれてからは郷里の子弟に讀書習字を
 教へられ且つ弟文吉と兄弟力を合せ夜を以て日につき農業を勵み勤
 儉を専らとし慈善を行ひしかば徳望郷閭に重く家資亦豊なるに至り

ました

大人は幼時天性活潑穎智ありて群兒に抜んづ養父母大人を愛撫すること甚厚く常に喜びて云はれますには後々我家を興す者此兒であること然るに大人六歳の時疾に罹られ醫藥更に効なく百方手を盡されしも疾益々重し養父母深く之を憂ひて居られましたか或日某來りて申すには此頃靈驗の著しい祈禱者あるを聞きましたか之を御迎へなされては如何ですかとてしきりに勧むるより御両親も然らばとて人を使わし之を迎へて祈念を乞はれましたか處が忽ち不思議なる御利益を受られ頼に全快致されました御両親の喜び譬ふるに物なく親戚近隣皆

其靈驗に驚かぬ者はなかつたといふ事です之れ大人が危篤を神明に救われ給ひし始めにして養父母の神明を敬せらるる事も之より益々深く其後ち大人の疾まれる事ある時わいつも祈願に由りて其都度御蔭を受けられたらうです

明治八年大人年十九重ねて大患に罹られ日々重きを加ふること前年にまさる両親も此度こそわ連も此世の者たることは出来まいと思ひ諦められし程なりしが此度も亦神明の加護により再び快復して健全の身とならる大人はかく屢々神助を得られたのであるから生涯身を惟神の大道に委ねらる養父の歿せられたのわ大人年二十七の時

此時から大人が家を継がれたのであります
 大人は幼より家庭に學ばれ長して漢籍を田中賢樹筒井竹水二翁に學
 ばれ後ち東京に遊び歸りて後は私塾を開きて専ら教授せらるる村民に
 推されて議員となられ明治二十年に神道本局教師に補せられ教會設
 立に力を盡し信徒を教導し教師を養成し明治三十二年に大成教々師
 に補せられ三十三年新に大道教會本部を設立して之が教長となり全
 國に教會講社を有し十數萬信徒の尊敬を受け三十四年には縣下西ノ
 京に鎮座ありし天神社の社殿頽廢するも修する者なきを以て我邸内
 の敷地を獻じて社地となし田畑を寄附して維持法を確立し新に社殿

拜殿等を建造して御移轉をなし其氏子總代となりてわ日露戦役の際
 其主任者と計り日夜戦捷祈禱を行ひ陸海軍人に寄贈配付せる神符は
 其數實に七十萬の多きに達する等敬神愛國の實を表せられしこと少
 からず又三十六年より歌文會に入り推されて名譽幹事とならる
 人爲り志慮遠大寛仁大度あり性快瀾にして慈善に厚く然諾必ず果す
 手工に巧にして音樂を好み三味尺八風琴ヴァイオリン等常に吹奏し
 て樂みとせられ和歌を咏じて思想を述べ筆硯を弄して情緒を寄せ生
 花謠曲亦得意にてありし

時に人の訪ふあれば喜びて迎へ更に城府を設け給ふことなし故に初

對面の人と雖も一度大人に接すれば温乎玉の如く談笑の間人をして
 怡も春風薫するの思ひあらしむ故に人屢々接せんことを希ふ其無邪
 氣なるに至りてわ小兒もなれ親しむ人々尊ふも大人自らわ敢て高き
 に居り給はず人崇むれば益々下り正直懇懃彌々至情を盡さる
 こゝにおもしろき話あり或時堺より一老人が此屋敷へ参いて來まし
 た之は教理を聞かん爲なり此時大人は自宅の庭で忠雄氏遊戯用の金
 輪損ぜしを直さん爲箇袖に頰冠といふ有様で鞆を出し鍛冶仕事を遣
 りて御座りました、トコロが輪の離れ目なく、着かぬのでやり直
 さんとして御座る處へ余は用事が有たので参り合せました大人余に

向ひなかく着かぬので今やりかへて居るのであるが旨く行かぬと
 の仰せなりしかば余は幸ひ堺の老人は鍛冶職と承はり候故彼を呼び
 てなさしめ給はばよろしからんと申せしに然らば頼まんと仰せで
 あつたから彼の老人に此事を談し且つ注意なし置きけるは鍛冶をな
 して御座るわ教長様であると然るに老人耳遠く聞取難かりしと見ゆ
 やがて其所に至り老人自ら鞆を扱ひ大人に向ひおつさんくこゝを
 もちて下さいあれをこうして下さいと云ふさま全く大人である事を
 知らざるものゝ如し大人其度毎に笑ひつゝ老人の言ふまゝになしお
 られたが事終りて後ち彼の老人教會へ立歸り暫らくして今日は教長

様に御面會を願う譯に参りませんかと云ふうことで余云ふ先きにあな
 たが、おつさんくと呼びて居た御方が教長様であるといひしに老
 人は大いに驚き先きの失禮を謝し余に御詫び申上吳よといへる事あ
 りき何人も大人自ら如此事をなさるとは思はぬからである
 人揮毫を請ふ時は喜びて之に應じ手づから表装し或は額とし或は掛
 物として之を與へられ更に報酬を受くる意なく費用は皆自ら辨じて
 之を成し人の喜ぶを見て樂みとせらる
 其他竹を求めて尺八を作り木を得てわ器具となし金物細工を試み鉢
 山を作らる

性甘き物を嗜まれ酒わ好み給わず烟草わ大に嗜まる宴に臨み給ふか
 又わ來人ありて飲み給ふ時は極小さき杯に二つ三つ召し上るのみ然
 も满面紅の如し常には召し上ることなく自らは好み給はざるも
 人に勧むることは至て御好きなり故に宴會又は來人ある時は三味尺
 八謠ひ等にて座を賑はし興を添へらるるが常なり食は至て少量の御
 方にて一日の糧僅か一合五勺位なり故に菓子果物等を少し食せらる
 る時は食事の時必ず幾分を減せらる食事の度毎に必ず先づ箸にて飯
 粒を挟み心中に祈念し又更に挟みかへ幾度もかくの如くして神明祖
 先に供せられ而して後召上がる

(身長 五尺壹寸 休聲 弱キ方 休聲 十二貫目)

國家事業に心を盡されし事は枚擧に違ありませんが大要を記さば、
 貧民救助に道路開拓に教諭薰陶に軍資献納に三陸海嘯に東奥凶作に
 學事奨勵に武徳會に赤十字社に或わ献金し或わ幹旋し功勞顯著其筋
 より賞せられし事わ數々であります
 宗教家としてわ神人不二の理を悟り死生を一貫し顯幽を洞明して安
 心立命の極を究め實踐躬行して人道の模範を示し眞理を穿ちて萬世
 不易の教訓を垂るゝ等實に人間以上の天徳を備へられし一大宗教家
 であります

昨冬病に罹らるるや自ら起たざるを知り妻子に諭し弟子に示されし
 豫言等聞く者實に感嘆敬服せぬものはないのです

大人の終らんとせらるゝ前日嗣子忠雄氏年甫めて十三將に小學に登
 校せんとす大人枕邊近く呼び寄せ申さるる様忠雄よく聞けよ、おか
 あさんと姉さんとはこうして側に居て看病してゐる故何時終るとも
 遺憾はないであろうが汝は今學校へ通ふて學問を精出さねばならん
 のであるから若し學校に業を受けて居る時父が命終るか又は學校か
 ら歸りし時もしも父一言も云ふことができぬと云ふ様な事ある時は
 今はさもあるまいが大きくなつた後は屹度殘念に思ふ故幸に今の中
 に末期の水を汲みて呉れよと懇ろに諭されたのですぐに其通りに水

を汲みて捧げられたから大人は一滴も余さず快よく之を飲まれまじ
た

是より先き母姉常に忠雄氏に教へて云はるる様、父上の仰せには此
度は死する故皆々覺悟せよとのたまへり故に汝も一言なりと自分の
意志を陳じ父上身まかり給ふとも跡々案じ給ふことなき様に申上げ
よと云ひ居られし程なれば此時も亦母姉諸共に之を勧められし忠
雄氏幼な心の胸迫りて言ふこと能はず只頭を垂れて泣かるゝのみ、
於是母姉共に涙を飲みて再三之を促されしも忠雄氏遂に言ふこと能
はず大人其よく言ふこと能はざるを察せられさらば汝が思ふことを

紙に記せよとの事なり依て其言に従ひて紙にしるさる大人之を讀終
て大に悦ばれ之れは父があゝの世へ歸る時汝の贈れる第一の土産とし
て之を柩に納めしめんこの事はいつく迄も必ず忘るゝなと繰返さ
れ、之でよしくと申されたり
大人の命旦夕に迫りながらかく最後の教訓を遺し置かるる實に至れ
り盡せりと云ふべし忠雄氏幼心にも身にしみ肝に銘して忘れんとし
て忘るゝ能はざるべし、子を愛する者教に従事する者誰もかくあら
まほしき事にこそ

死を見る歸するが如く晏如たり病中謠をうたひ又人にも謠はしめ臥

しながら手を拍ち萬歳を唱へ彫刻師を招きて肖像を刻ましめ或わ葬送の準備をなさしめ謚號を自撰し齋主を委囑し置かるる等用意周到なる聞くもの實に感ぜざるはなし

妻子看護するに當り顔色愁ふるあらば慰めて云はるる様、安んぜよ身わ死すとも靈わ活きて永く顯幽の守護神となり汝等わ云ふに及はず余を慕ふ教師信徒をも守護すべし悲哀せば却て歸幽の妨げとなると側にある者、否々父上愁嘆するのでわありません笑ふて居るのですと答ふれば、ア、嬉し、嬉しとのたまふ

今年明治四十年五月十六日朝今晚限りやて、と申され此日、夕刻、

去の一字を指先さにて空に書き示され詰員一同を呼び集へ午後九時半十重子刀自に身を扶け起さしめ端座し拍手合掌し溘然瞑目し給ひぬ時に十時なりき享年五十嗚呼惜ひ哉

英靈天神に復命し功績万年に傳はりて光明赫灼たらん嗚呼大人は人生免るべからざる死に對してかく安心立命の好摸範を示して悠然昇天し茲に天職を全ふせらる

一男三女あり男忠雄氏家を繼ぎ室十重子刀自教會長を後任せらる家の業教の務両々相榮わて窮りなかるべし

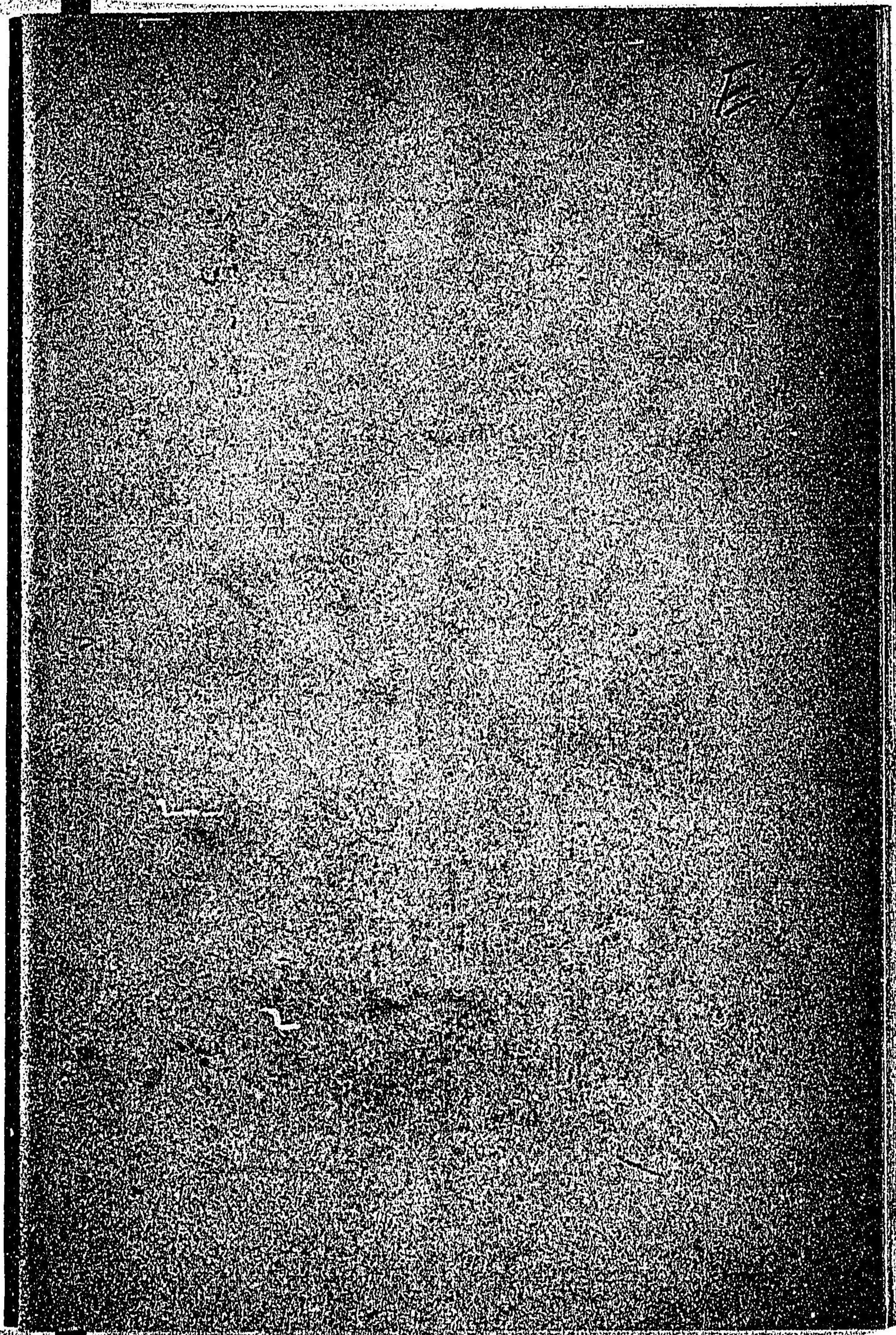
264
899

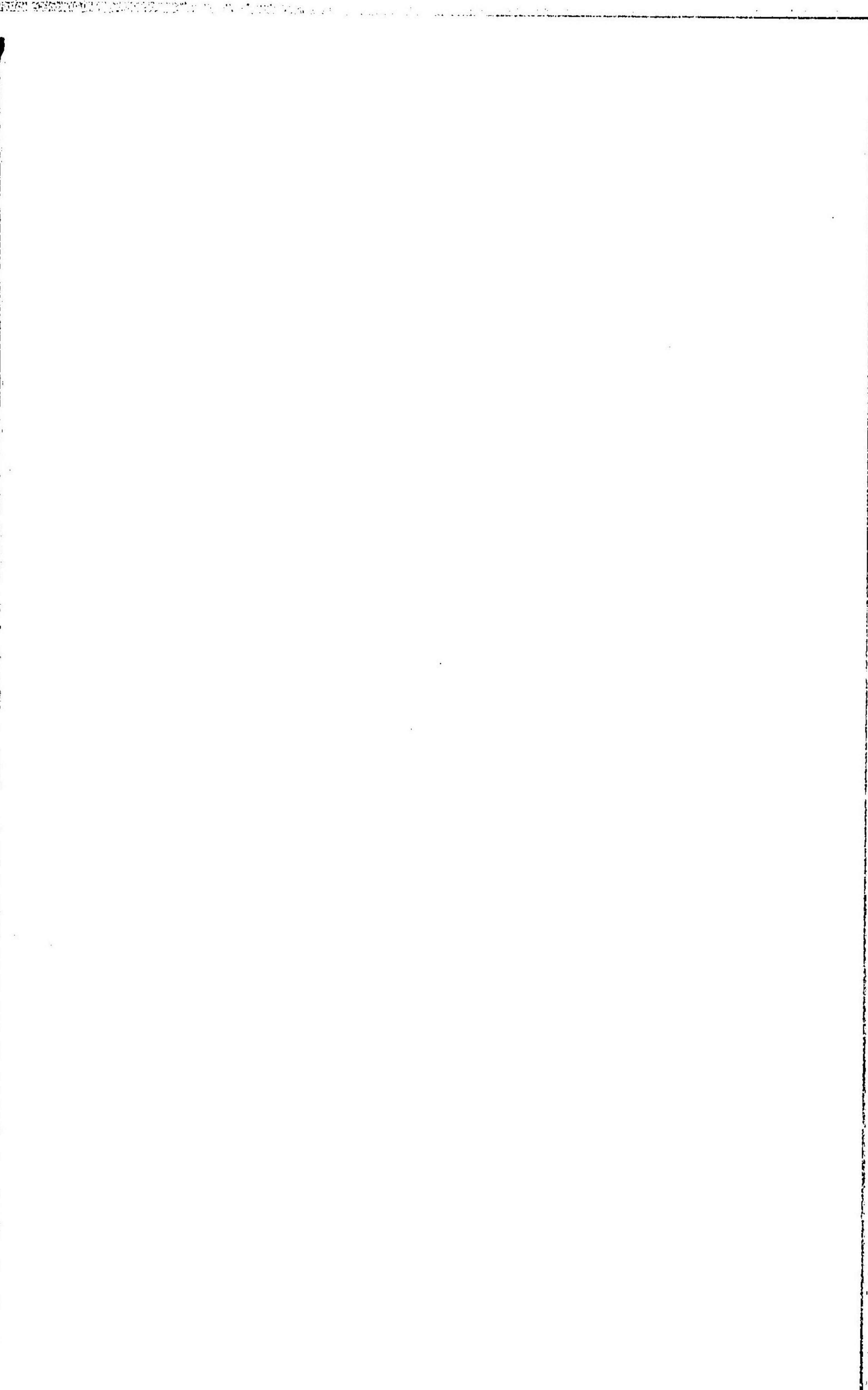
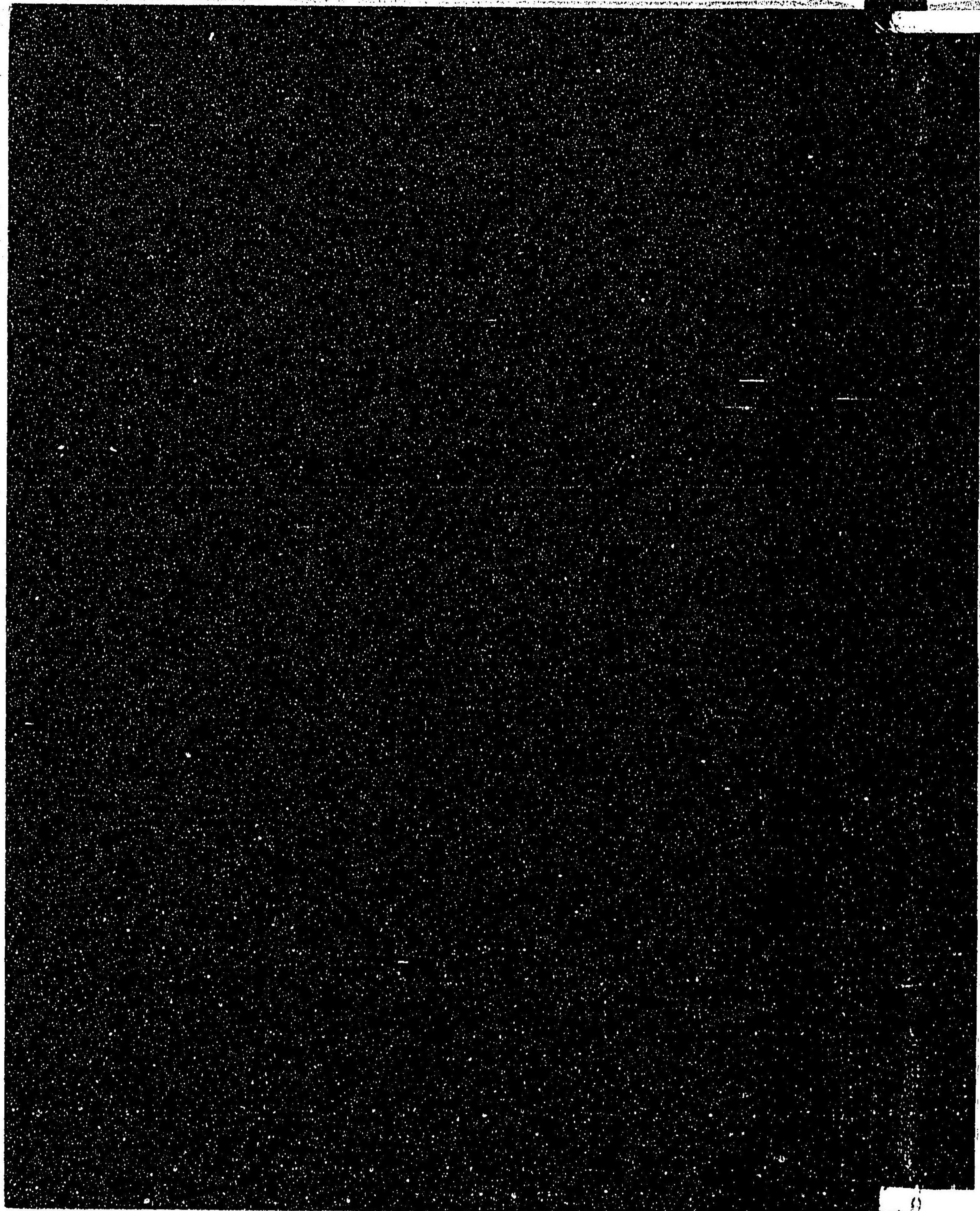
明治四十四年四月十五日印刷
明治四十四年四月二十日發行

奈良縣生駒郡安堵村大字東安堵
千四百六十四番地

編輯兼
發行人 石田正五

奈良市橋本町三十六番地
印刷所 奈良明新社





7
5

飯田大人之略傳

石田守義

国立国会図書館

013809-000-6

特47-775

飯田大人之略伝

石田 守義(正五) / 著

M44

ABB-0018



特

7

